

青苗遺跡～貝塚台地北東斜面～

～奥尻空港整備事業・進入灯台建設に伴う埋蔵文化財発掘調査～



平成 15 年度

奥尻町教育委員会

青苗遺跡～貝塚台地北東斜面～

～奥尻空港整備事業・進入灯台建設に伴う埋蔵文化財発掘調査～

平成 15 年度

奥尻町教育委員会

例 言

1. 本書は奥尻空港進入灯台建設工事に伴う青苗遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本諸の編集、執筆は木村哲朗が行った。
3. 発掘作業は以下のものが従事した。
天内千秋 荒谷恵子 小黒敏光 蛸崎美子 近藤美佐子 高田こと子 高田サキノ 手塚芳子
中沢一夫 三浦京子
4. 整理作業の分担は以下の通りである。
土器接合・復元・拓本・実測・トレース：天内千秋、近藤美佐子
写真撮影・現像：中沢一夫
石器実測・トレース：木村哲朗

凡 例

1. 本書の略語は以下のように用いた。
駒ヶ岳起源の火山灰：K o - d
2. 本書の挿図は、奥尻島南部の遺跡分布図：1 / 25,000、遺跡周辺の地形図：1 / 2,500
大グリット配置図・発掘区地形図：1 / 400、土器実測図：1 / 4
土器拓本図・礫石器実測図：1 / 3、剥片石器実測図：1 / 2 である。
3. 本書の土器計測単位はcm、石器はmmである。
4. 本書の挿図の向きは方位で記す。
5. 写真図版の縮尺は各実測図・拓本図の縮尺にあわせた。

目 次

例 言	i
凡 例	i
目 次	ii
挿図目次	iii
挿表目次	iii
写真図版目次	iv
第 I 章 調査の概要	1
1 節 調査要項	1
2 節 調査体制	1
3 節 調査に至る経緯	1
4 節 調査方法	1
5 節 旧石器確認調査	2
6 節 遺物の分類	2
第 II 章 遺跡の位置と環境	3
1 節 奥尻島の環境	3
2 節 青苗遺跡の立地と環境	4
3 節 青苗遺跡の概要	4
第 III 章 層位と遺構	6
1 節 基本層序	6
2 節 遺 構	8
第 IV 章 出土遺物	9
1 節 土 器	9
2 節 石 器	11
第 V 章 総 括	18
写真図版	21

挿 図 目 次

図Ⅰ－１	大グリット配置図・小グリット摸式図	2
図Ⅱ－１	奥尻島南部の遺跡分布図	3
図Ⅱ－２	遺跡周辺の地形図	5
図Ⅱ－３	発掘区地形図	5
図Ⅲ－１	土層断面図（１）	6
図Ⅲ－２	土層断面図（２）	7
図Ⅲ－３	フレイクチップ集中地点と出土遺物	8
図Ⅲ－４	集石遺構図	8
図Ⅳ－１	土器と出土状況図	10
図Ⅳ－２	石器（１）	13
図Ⅳ－３	石器（２）	14
図Ⅳ－４	石器（３）	15

挿 表 目 次

表Ⅲ－１	フレイクチップ集中地点出土遺物一覧表	8
表Ⅳ－１	復元土器一覧表	10
表Ⅳ－２	拓本土器一覧表	11
表Ⅳ－３	石鏃一覧表	15
表Ⅳ－４	つまみ付きナイフ一覧表	15
表Ⅳ－５	削器一覧表	15
表Ⅳ－６	石核一覧表	16
表Ⅳ－７	Rフレイク一覧表	16
表Ⅳ－８	Uフレイク一覧表	16
表Ⅳ－９	石製品一覧表	16
表Ⅳ－10	すり石一覧表	16
表Ⅳ－11	たたき石一覧表（１）	16
表Ⅳ－12	たたき石一覧表（１）	17
表Ⅳ－13	砥石一覧表	17
表Ⅳ－14	石皿一覧表	17
表Ⅳ－15	台石一覧表	17

写真図版目次

図版 1	23
図版 2	24
図版 3	25
図版 4	26
図版 5	27
図版 6	28

第 I 章 調査の概要

1 節 調査要項

事業名	奥尻空港整備事業・進入灯台建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	
委託者	北海道	
受託者	奥尻町教育委員会	
遺跡名	青苗遺跡（貝塚台地北東斜面）	
所在地	奥尻郡奥尻町字青苗	
調査面積	401 m ²	
調査期間	平成15年 6 月 5 日～11月28日（現場期間、平成15年 6 月13日～ 7 月11日）	

2 節 調査体制

奥尻町教育委員会	教育長	山内脩介
	課長	竹田 彰（平成15年 9 月30日まで）
	局長	工藤 勇（平成15年10月 1 日から）
	主幹	泉沢克尚
	調査担当者	木村哲朗

3 節 調査に至る経緯

奥尻空港整備事業による新空港建設に伴い、航空機誘導のための、進入灯台を新たに建設する必要に迫られた。進入灯台の計 3 基のうちの最先端にあたる 1 基は、周知の青苗遺跡に建設することから、平成13年 7 月進入灯台建設地点及びその造成のための取りつけ道路予定地2,000 m²の試掘調査を行った。その結果、若干の縄文・擦文土器等を検出し、遺物包含層であることから平成15年度の調査が決定的となった。その後、進入灯台及びその取りつけ道路の地点が変更され、再協議の結果、平成14年 10 月、新たに変更地点の試掘調査を行った。この時の調査では 1 ケ所のみ遺物が確認され、70 m²程の範囲が調査地点に加わり、それと、平成13年の試掘調査で遺物包含地とし、変更のなかった一部の地点と合わせて、計401 m²を調査範囲とした。

4 節 調査方法

調査方法はグリット発掘で、グリットは進入灯台取りつけ道路の中央線（直線部分）に並行して設定、南北軸は中央線に垂直に x 軸とし、東西軸は中央線に並行して y 軸として、5 m×5 mのグリットを設定した。グリットの呼称は x 軸を A～I、y 軸を 1～16とし、各北東端の杭名をグリット名とした。大グリットは 1 mのメッシュで25分割して小グリットとし、包含層出土の遺物取り上げは、この小グリットを基準に取り上げた。

調査は攪乱層や表土層をバックホーで除去し、除去後は手ぐわや移植ゴテによる調査となった。発掘区は進入灯台建設用地である南東側と取りつけ道路予定地である北西側に分かれており、特に北東側は30度を越える急傾斜の場所もあって、危険を伴う調査であった。

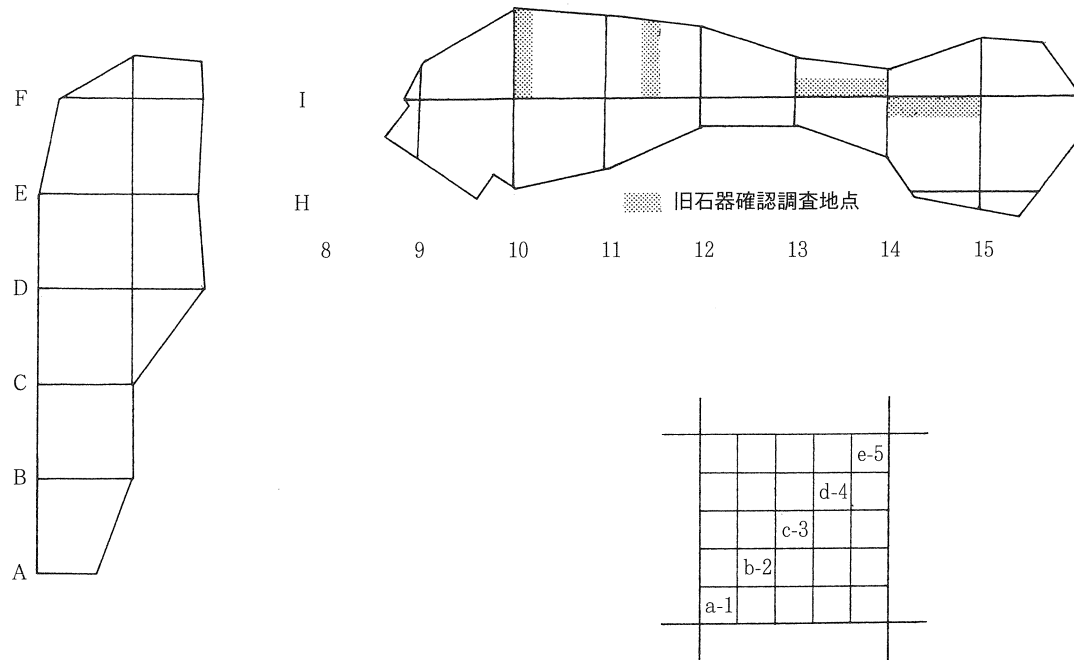


図 I-1 大グリッド配置図・小グリッド模式図

5 節 旧石器確認調査

本遺跡では20㎡の範囲において旧石器確認調査を行った。方法は、各班に長さ5m前後、幅1mのトレンチを4ヶ所掘り下げ、場所によっては岩盤に到達するまで掘った。一部に炭化物の可能性のある黒い染みのようなものを検出したが、遺物は検出されなかった。

6 節 遺物の分類

1 土器

- I 群土器 縄文時代早期中葉のもの。
- II 群土器 縄文時代早期末葉のもの。
- III 群土器 縄文時代中期のもの。
- IV 群土器 擦文時代のもの。

2 石器

剥片石器は石鏃、楔形石器、ナイフ、つまみ付きナイフ、Rフレイク、Uフレイク、石核に、礫石器は、石斧、すり石、たたき石、砥石、石皿、台石、石製品に分類した。

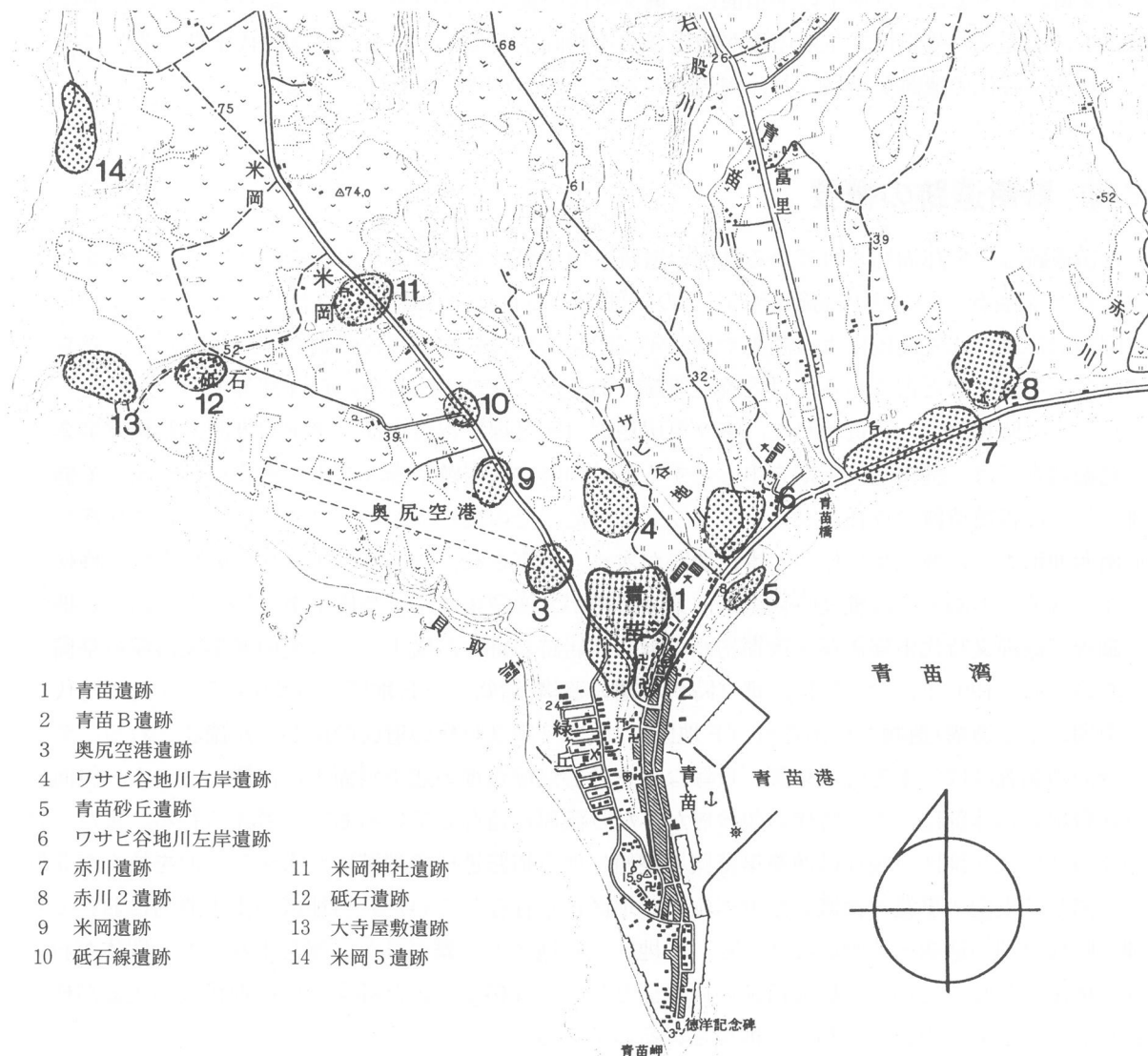
第Ⅱ章 奥尻島の位置と環境

1節 奥尻島の環境

奥尻島は北部日本海に浮かぶ面積143.886㎡の、北海道最大の離島である。南からは対馬暖流に洗われ、冬期には寒流のリマン海流の影響を受ける、日本海交易の要衝の島である。

北海道本島（むかえ）との距離も近いところで、大成町の帆越岬と島の北端に位置する稲穂岬との間で18kmであり、本州との距離も、帆船の時代においても季節風に乗れば1日とかからず移動できたという位置にある。“離”島は、逆に、人と人を結び付ける一役を担っていたといえよう。

もう一つ、奥尻島の環境を特徴づけるものに島を被う森の存在がある。奥尻島は日本海の北方に位置していながら、対馬暖流の影響も強く受けるため、温暖であり且つ、豊富な水資源に恵まれた島でもある。温暖な気候と豊富な水は島全体をブナを中心とした緑の森で被い、豊かな水を貯え、森は島の周辺の海を豊かな漁場にしてきた。現在においても、全面積の84%が森林で占めている。林相もヤブコウジ、シュンランなど“むかえ”では見ることのできない暖地系の植物が認められるほか、ダケカン



図Ⅱ-1 奥尻島南部の遺跡分布図

バナなどの北方系の樹木も成育するなど、植物の世界でも南北の植生が交錯する状況となっている。

こうした恵まれた自然環境が、北から、南から渡来した人々を受け入れる経済的基盤となったことは間違いないであろう。

奥尻島は、まさに森の“揺り籃”に生まれ成り立った文化交流の拠点とも言えるのである。

2節 青苗遺跡の立地と環境

青苗遺跡は、奥尻島の南端、青苗地区、標高20～30mの海岸段丘及びその段丘に続く、標高10～20mの斜面上に位置する。遺跡の南東部は主に擦文時代の貝塚や鉄製錬遺構の検出された、貝塚台地地区や、墳墓の発見された山本台地地区があり、遺跡の中央部の墓所前三叉路地区や、西部のA地区、北部のカベ山（C地区）にかけては縄文時代中期の遺構・遺物が検出されている。概して現在の市街地に近いところに擦文時代の遺跡が、それから離れるに従い、縄文時代の遺跡が認められるという傾向がある。これは、もともと縄文遺跡が全体を占めていたところ、天然の良港である青苗湾に近い東南側を中心に擦文人が居住し、縄文遺跡を破壊したことに因るものと考えられる。

縄文遺跡の中では、台地上の平坦面に、縄文時代中期の生活の場が、それより外れた、台地の縁や斜面上には縄文時代早期の生活の場が検出される傾向がある。これも、縄文時代中期の遺跡によりそれより古い時代の遺跡が破壊され、周辺部のみに残ったためといえよう。

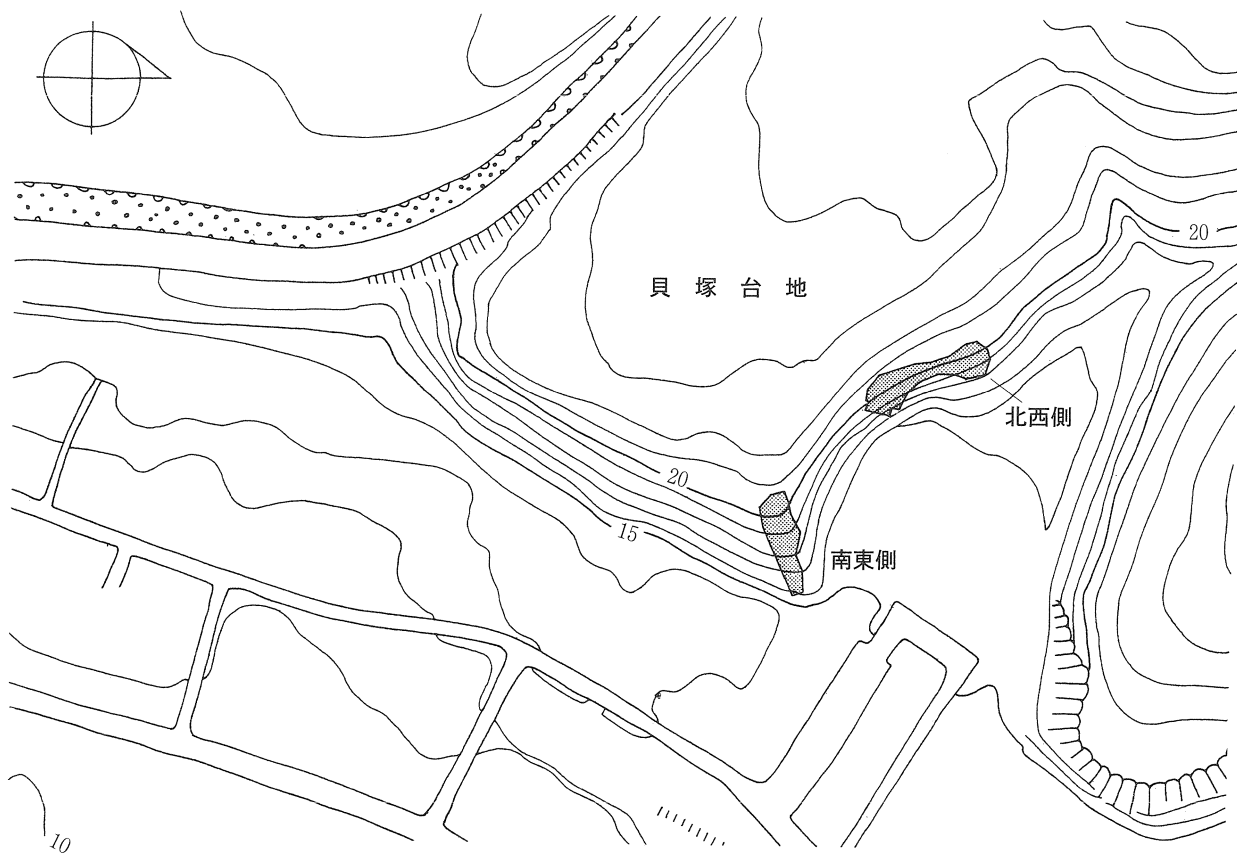
3節 青苗遺跡の概要

青苗遺跡は、現在周知されている島内の遺跡の中で最大規模であり、古くは1924年（昭和6）に発表された深瀬春一の「奥尻島紀行」にその一部である青苗貝塚が紹介されている。その後、1949年（昭和24）に、江差高校による調査や1959年（昭和25）の札幌西高校の調査をはじめ、鈴木尚や桜井清彦による調査など古くから注目された遺跡であるが、その主な対象は貝塚部分であった。

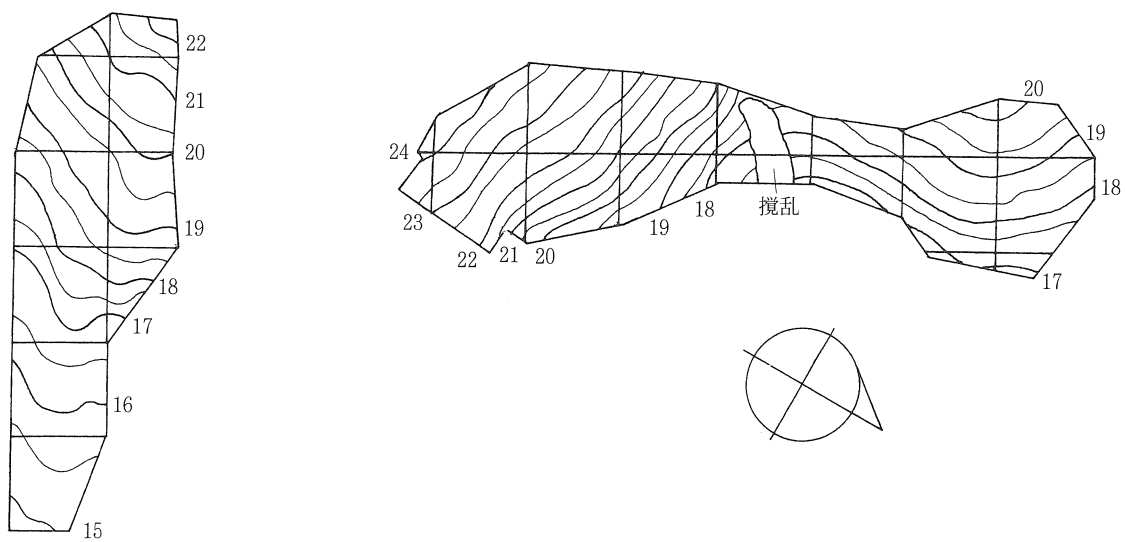
1976年（昭和54）から行われた、道々奥尻島線（39号線）青苗市街～奥尻空港間道路整備事業に伴う発掘調査では、縄文時代中期を中心とする多くの竪穴住居跡や膨大な出土遺物を得、改めて縄文遺跡としての青苗遺跡の存在がクローズアップされた。その後、1993年（平成5）の7月に起きた北海道南西沖地震の復興工事に伴い、青苗遺跡が次々と調査され、1994年（平成6）の防災集団移転工事に伴うA地区の調査では縄文時代中期前葉の遺跡が、漁業集落環境整備工事に伴うカベ山（C地区）の調査では縄文時代中期後葉～後期初頭の竪穴住居跡14軒等が検出。その後の漁業集落環境整備事業においても、1995年においては、縄文時代早期の遺構・遺物が（E地区）、1996年でも、縄文時代早期～中期に至る遺構・遺物が検出され（F地区）、改めて縄文時代の遺跡の広がり確認されるに至った。

今回の調査区は、本遺跡の東側、貝塚などを含む貝塚台地の北東斜面上に位置している。斜面上の貝塚台地の本体部は、擦文時代の包含層がかなり濃厚に遺存しているものと考えられる。また、斜面の北西部にはE地区（現在は漁業集落環境整備に伴う道路造成で消滅）が広がり、沢を挟んで北側には、同じく上記の事業で消滅したカベ山（C地区）が存在していた。当地区の出土遺物においても、縄文時代早期の遺構・遺物の存在から、E地区・F地区との繋がりが、擦文土器の復元個体が斜面上部で検出されたことから、擦文遺跡の周縁部としての性格が、また縄文時代中期後葉の土器が検出されたことからカベ山との繋がりが推察されるのである。

なお、包含層そのものは、上位に多く遺存する傾向があり、下位ほど流出が甚だしい。また北西側の沢状地形部分は殆どが攪乱を受けていた。



図Ⅱ-2 遺跡周辺の地形図



図Ⅱ-3 発掘区地形図

第三章 層位と遺構

1節 基本層序

土層断面は北西側はx軸に沿ったIラインを、南東側はy軸に沿った2ラインに設定し、観察した。なお、本遺跡は急斜面が調査区の大半を占めていたため、包含層は多く遺存していた場所と流出してほぼ残されていない場所があった。多く遺存していた場所は段丘上に近い地点で、ここでは、若干のKo-d層が残っている場所もあった。

I層：表土層。主に笹に被われていた層で、バックホーにより除去した。

Ko-d層：駒ヶ岳起源の火山灰層。

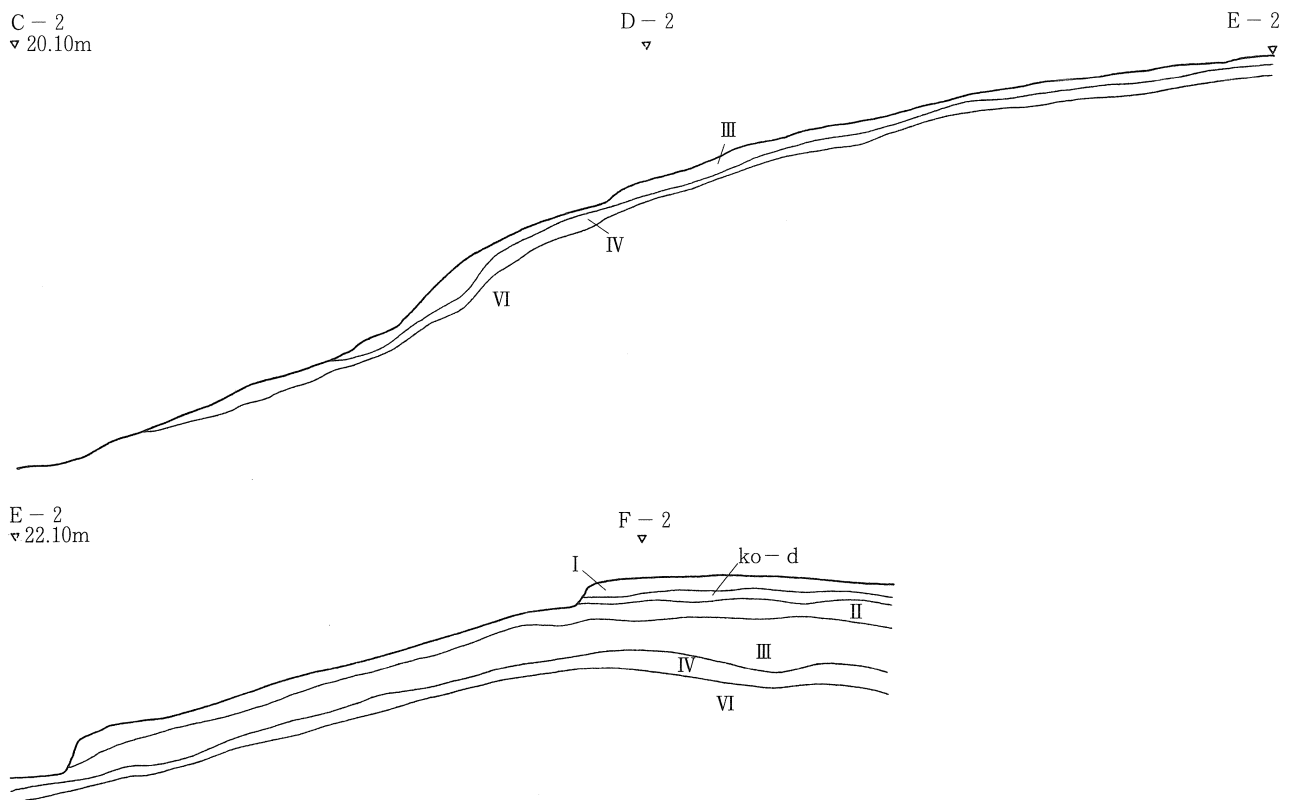
II層：黒色土層。今回の調査では検出されなかったB-Tm（白頭山-苦小牧火山灰起源）層の上位にある黒色土層で、主に擦文時代の遺物包含層。

III層：黒褐色土層：縄文時代早期末葉を中心とする包含層。中期の遺物も出土。

IV層：褐色土層：縄文時代早期末葉を中心とする包含層。早期中葉の遺物も混ざる。

V層：灰褐色土層：砂層を含む。堆積した場所と全く認められない場所とがある。

VI層：黄褐色土層：ローム層である。旧石器確認調査の対象土層。遺物は検出されず。



図III-1 土層断面図(1)

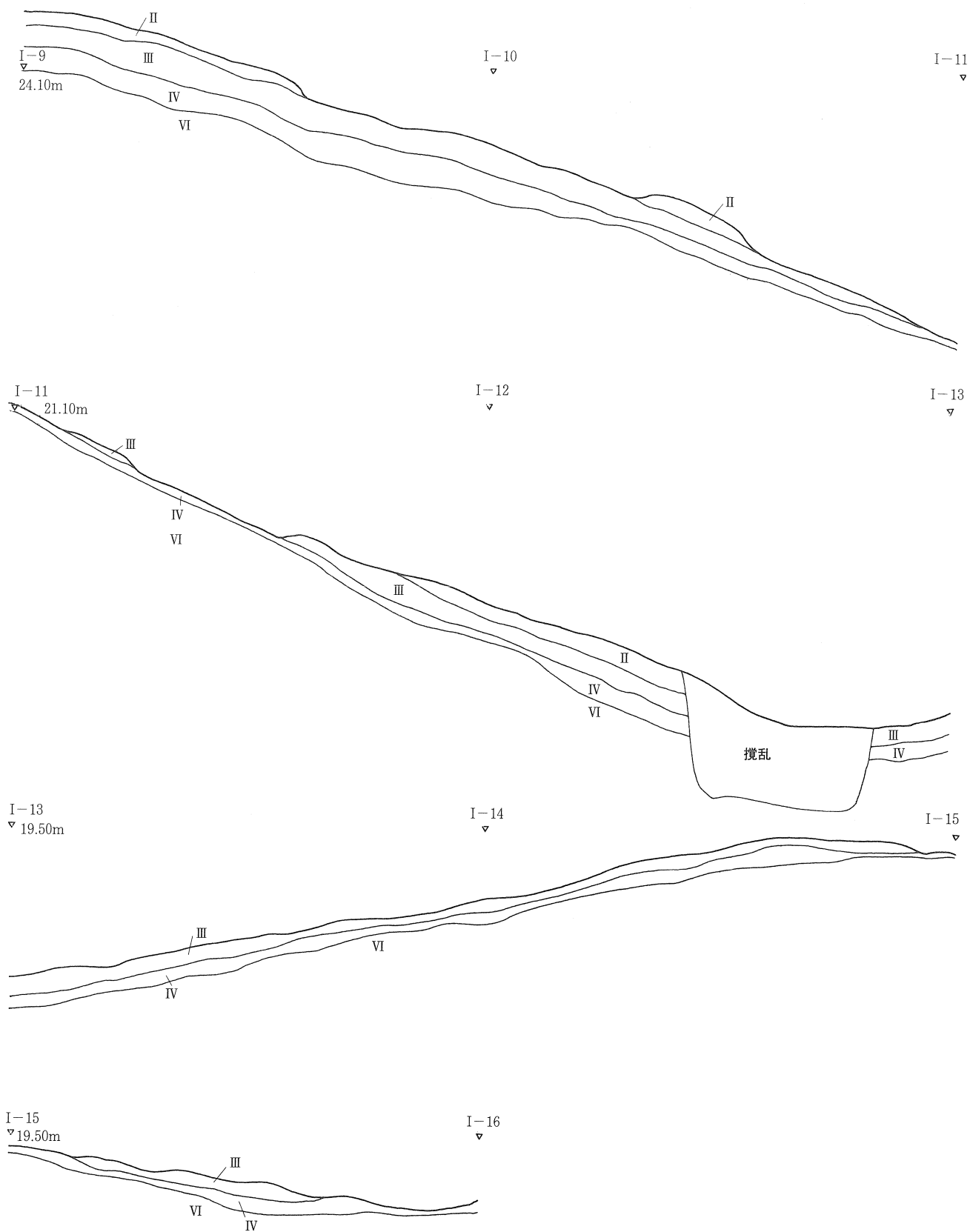


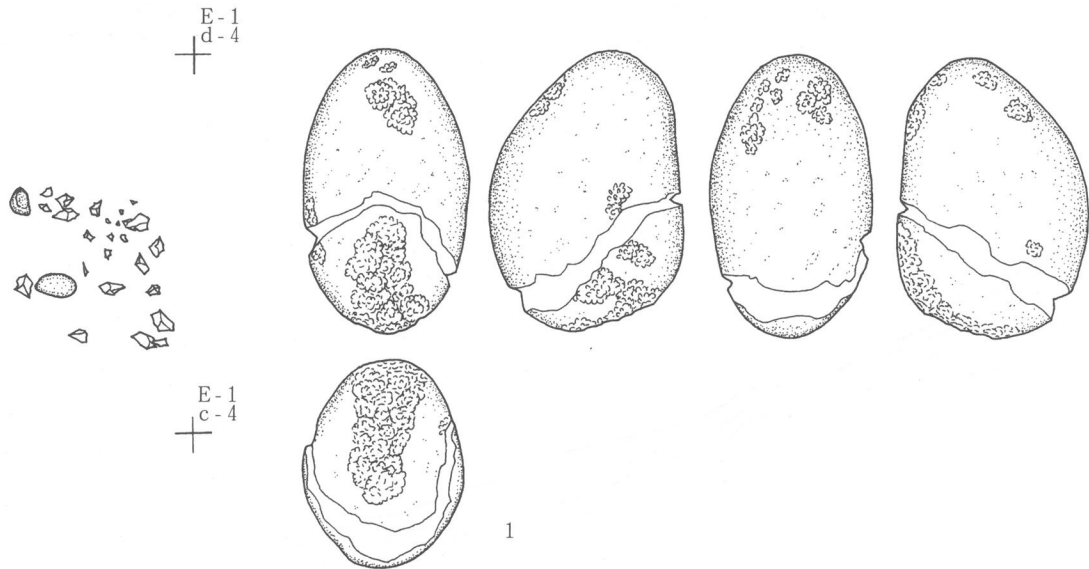
图 III-2 土层断面图 (2)

2節 遺構

(1) フレイクチップ集中地点

遺構

南東側、E-2区のIV層に検出された。フレイクチップの他、割れたたたき石1点が検出され、当地点とセット関係にあったものと考えられる。なお、この地点の東側、E-1グリットからは、1点のたたき石が検出されており、当地点との関わりが注目される。周辺からII群土器が出土していること、IV層上面からの検出であることから、縄文時代早期末葉頃の遺構と考えられる。



図Ⅲ-3 フレイクチップ集中地点と出土遺物

遺物

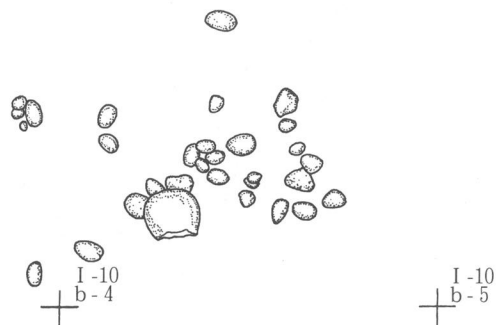
1はたたき石である。敲打痕は下部を中心に腹面や側面、背面にも認められる。下部が最も使いこまれ、大きく抉れる。フレイクチップは計102点の出土である。

表Ⅲ-1 フレイクチップ集中地点出土遺物一覧表

No.	種類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図番	備考
1	たたき石	112.2	65.0	76.7	698	花崗閃緑岩	1	割れた状態で出土

(2) 集石遺構

北西側、I-10区のIV層下位から検出された。集石はほぼ1㎡の範囲内に分布する。礫は、直径5~10cm位のものが主体で、その機能・用途は明らかでないが、同地点出土のたたき石と形状、大きさ等が類似していることから、たたき石用の礫を保管していた場と受け取られなくもない。時期は層位や周りの出土遺物等から、縄文時代早期末葉と考えられる。



図Ⅲ-4 集石遺構図

第IV章 出土遺物

1節 土器

全部で150点の出土である。そのうち復元個体は1体である。

I群土器：縄文時代早期中葉のもの。貝殻条痕文土器である。1・2がこれにあたる。

1・2は同一個体の破片と考えられる。出土地点はともに北西側のI-9区でこの2点が今回の調査で確認された唯一のI群土器である。

II群土器：縄文時代早期末葉のもの。中茶路式、コッタロ式、東釧路IV式などに相当するもの。3～15がこれにあたる。土器破片としては最も多い出土である。

3～9は微隆起線文の施されたものである。3・4は微隆起線文の間に短縄文が施されたものである。3は微隆起線文と短縄文帯が交互に水平に施されているが、4はそれらが幾何学的にほどこされたものと考えられる。5～7は微隆起線文の間に斜行縄文が施されているもので、ともに微隆起線文施文後に縄文を施す。8は微隆起線文の間に2種類の異なる原体による絡条体圧痕文が認められるもの。目の細かい絡条体圧痕文は上位は横方向、下位は縦方向に施されている。9は綾絡文の施されたものである。10～12は羽状燃糸文の施されたもの。10は当該期唯一の口縁部の破片で、刺突列が3段めぐり。11・12は胴部破片である。13～15は縄文の施されたもので、13には綾絡文が認められる。14・15は縄文のみのもので、14は原体の異なる2種類の縄文が施されている。15が斜行縄文の施されたものである。

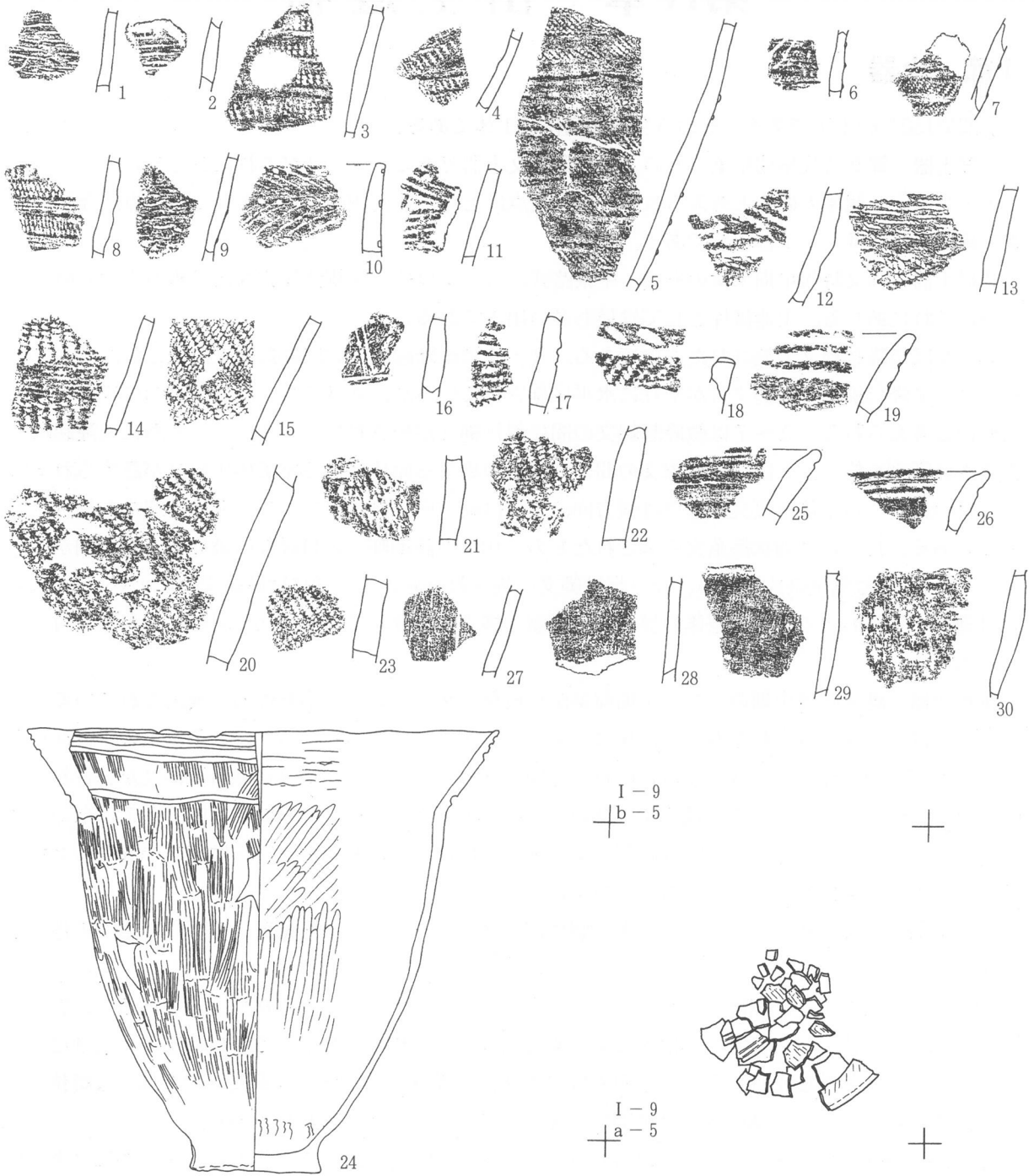
III群土器：縄文時代中期のもの。中期前葉から後葉にかけてのものが断片的に検出されている。

16～18は沈線文の施されたもので、16は2条1組の沈線が認められ、17では3条以上の平行沈線が認められる。18は口縁部の破片で口唇に斜め方向の刻みが認められ、地文には斜行縄文が施されている。19も口縁部の破片で3本の縄線文の認められるものである。地文は摩滅して明らかではない。20～23は地文のみのものである。20は胴部下位の部分の破片。22は斜行縄文、23は撚りの異なる2種類の縄文を使って羽条に施しているものである。

IV群土器：擦文時代のものである。復元個体が1体、I-7区、当発掘区の境界ぎりぎりの地点から出土した。

24は底部が張り出し、胴部が内湾し立ち上がり、口縁部の大きく開く深鉢形土器である。口唇の断面形状は丸みを持つ。口唇直下には、2条、頸部には1条の横走沈線が巡る。口縁部から胴部にかけて縦位のハケメ状擦痕が認められる。内面は口縁部には横位、胴上部には斜位、胴下部には縦位のミガキが施されている。色調は外面は黒褐色～褐色、内面は黒褐色～黄褐色である。

25・26は口縁部の破片で、ともに口唇直下に沈線文のめぐりものである。25は2条、26は3条の沈線が認められる。形状は25が僅かに内湾する。27～30は胴部の破片である。27には縦位の沈線が認められるもの。28～30は無文のものであるが、3点とも縦位の整形痕が認められるものである。



図Ⅳ-1 土器と出土状況図

表Ⅳ-1 復元土器一覧表

No.	分類	グリッド	層位	器高	口径	底径	器厚	備考	図番
1	Ⅳ	1-8	Ⅱ	27.3	29.2	8.3	0.6	図番29と同一個体か	24

表Ⅳ-2 拓本土器一覧表

No.	分類	グリット	層位	部位	文 様	備 考	図番
1	I	1-9 c-2	Ⅳ	胴 部	貝殻条痕文・沈線文	2と同一個体	1
2	I	1-9 a-3	Ⅳ	胴 部	貝殻条痕文・沈線文	1と同一個体	2
3	Ⅱ	試掘		胴 部	微隆起線文・短縄文		3
4	Ⅱ	1-11 c-5	Ⅲ	胴 部	微隆起線文・短縄文		4
5	Ⅱ	1-9 a-1	Ⅲ	胴 部	微隆起線文・縄文		5
6	Ⅱ	E-2 b-3	Ⅲ	胴 部	微隆起線文・縄文		6
7	Ⅱ	H-9 d-1	Ⅳ	胴 部	微隆起線文・縄文		7
8	Ⅱ	E-1 e-3	Ⅳ	胴 部	微隆起線文・絡条体圧痕文		8
9	Ⅱ	I-12 e-2	Ⅳ	胴 部	微隆起線文・綾絡文		9
10	Ⅱ	H-9 e-2	Ⅳ	口縁部	刺突文・羽状捺糸文		10
11	Ⅱ	I-9 c-1	Ⅲ	胴 部	羽状捺糸文		11
12	Ⅱ	1-9 a-1	Ⅲ	胴 部	羽状捺糸文		12
13	Ⅱ	H-9 c-2	Ⅲ	胴 部	羽状捺糸文・綾絡文		13
14	Ⅱ	H-10 d-5	Ⅲ	胴 部	縄文		14
15	Ⅱ	D-1 a-1	Ⅲ	胴 部	縄文		15
16	Ⅲ	I-11 c-5	Ⅲ	胴 部	沈線文・縄文		16
17	Ⅲ	D-2 b-3	Ⅲ	胴 部	沈線文・縄文		17
18	Ⅲ	E-2 b-3	Ⅲ	口縁部	沈線文・縄文		18
19	Ⅲ	E-1 a-3	Ⅲ	口縁部	縄線文・縄文		19
20	Ⅲ	I-10 d-1	Ⅲ	胴 部	縄文		20
21	Ⅲ	H-13 c-5	Ⅲ	胴 部	縄文		21
22	Ⅲ	I-11 c-4	Ⅲ	胴 部	縄文		22
23	Ⅲ	攪乱		胴 部	縄文		23
24	Ⅳ	E-1 b-4	Ⅱ	口縁部	沈線文		25
25	Ⅳ	H-8	Ⅱ	口縁部	沈線文		26
26	Ⅳ	H-10 b-2	Ⅱ	胴 部	沈線文		27
27	Ⅳ	H-9 b-2	Ⅱ	胴 部	無文		28
28	Ⅳ	I-8	Ⅱ	胴 部	無文	図番24と同一個体か	29
29	Ⅳ	H-8	Ⅱ	胴 部	無文		30

2 節 石器

計398点の出土である。フレークチップを除くと、全体として礫石器が多い。そのうちたたき石は43点と大半を占める。

石 鏃

計2点の出土である。1は無茎のもので黒曜石製、鏃身は極めて丁寧な剥離による整形を行っている。2は有茎のもので頁岩製。2に較べると鏃身は厚く、刃部の整形も若干雑である。3は石鏃未製品と考えられる。

つまみ付きナイフ

計3点の出土である。4・5はかろうじてつまみ部を作出しているのが確認できたことから、つまみ付きナイフとしたが、ともに厚みがあり、5などは刃部の加工も中途半端で、習作の可能性がある。

6は丁寧な剥離により刃部を作出したものである。7も破損品と考えられるもの。6・7はともに腹面のみの加工で、背面には2次的な刃こぼれが認められる程度。4点とも頁岩製である。

削 器

H-15区から8が1点のみ出土している。腹面の一侧縁のみを加工し、刃部としている。石材は頁岩である。

R フレイク

ここでは、2次剥離を受けているが、石器の器種を特定できないもの9をRフレイクとした。

石 核

比較的多く、11点が出土している。分布は南東側が圧倒的に多く、9点が出土している。

原 石

全部で17点の出土である。出土地点は南東側に多く、特にE-2区では6点が出土している。

石製品

2点の出土である。10は緑色泥岩製で、整形のありかたなど磨製石斧と似るが、刃部はなく、その機能、用途は不明である。H-13区の出土。11は、泥岩製の自然石に、人工的に穿孔した石製品と考えられる。H-10区からの出土である。

フレイクチップ

一部の安山岩製のものを除き、殆どが頁岩である。南東側からは111点、北西側からは166点が出土する。多く出土したグリットは、南東側ではE-1・2区、北西側ではH-14区である。

すり石

全部で6点の出土である。そのうち、包含層出土のものを全て図示した。南東側から1点、北西側から3点の出土である。12は、南東側より出土した唯一のものである。敲打調整がほどこされていること、すり面の幅が広いことなどは、北海道式石冠に似る。13・14は断面三角のものである。13・14ともに敲打痕が認められる。15はすり面の幅が広く、器体に対してすり面が斜めに施されているものである。すり面以外の器体には敲打整形が施されているほか、側縁部に擦痕が認められる。すり面は平らであるが、擦痕は認められない。石質は安山岩である。

たたき石

全部で43点の出土である。南東側からは8点、北西側からは30点の出土で、そのうちH-10区から5点、I-10区からは12点が出土する。このうち南東側のもの3点、北西側のもの14点を実測した。16~18は南東側のもの。17は敲打面として使われた下部が大きくえぐれているものである。18は各面を敲打面として利用しているほか、側面下部をすり面として利用できるように、平らにしているが擦った跡はない。16は全体に敲打痕が認められるもので、敲打痕が隙間なく全面を被っているものである。19~33は北西側のもの。19・20・23~27・30~32は、主に下部を使用しているものである。19・25が下端部以外も使用しているもので、25は局部的ではあるが全面に敲打痕が認められる。28は腹面に敲打痕が、29は側縁の下部にそれが認められる。33も25同様、局部的ながら全面に敲打痕が認められるが、下部に敲打痕が線状に施されており、線状の部分に先端の鋭いもので引っ掻いた跡が認められ、異質の観を呈する。おそらく、装飾的な文様をえがいたものと考えられる。大きさは、21・23・26・27・30~32など小さいものが比較的目立つ。30にはすり面が認められる。

砥 石

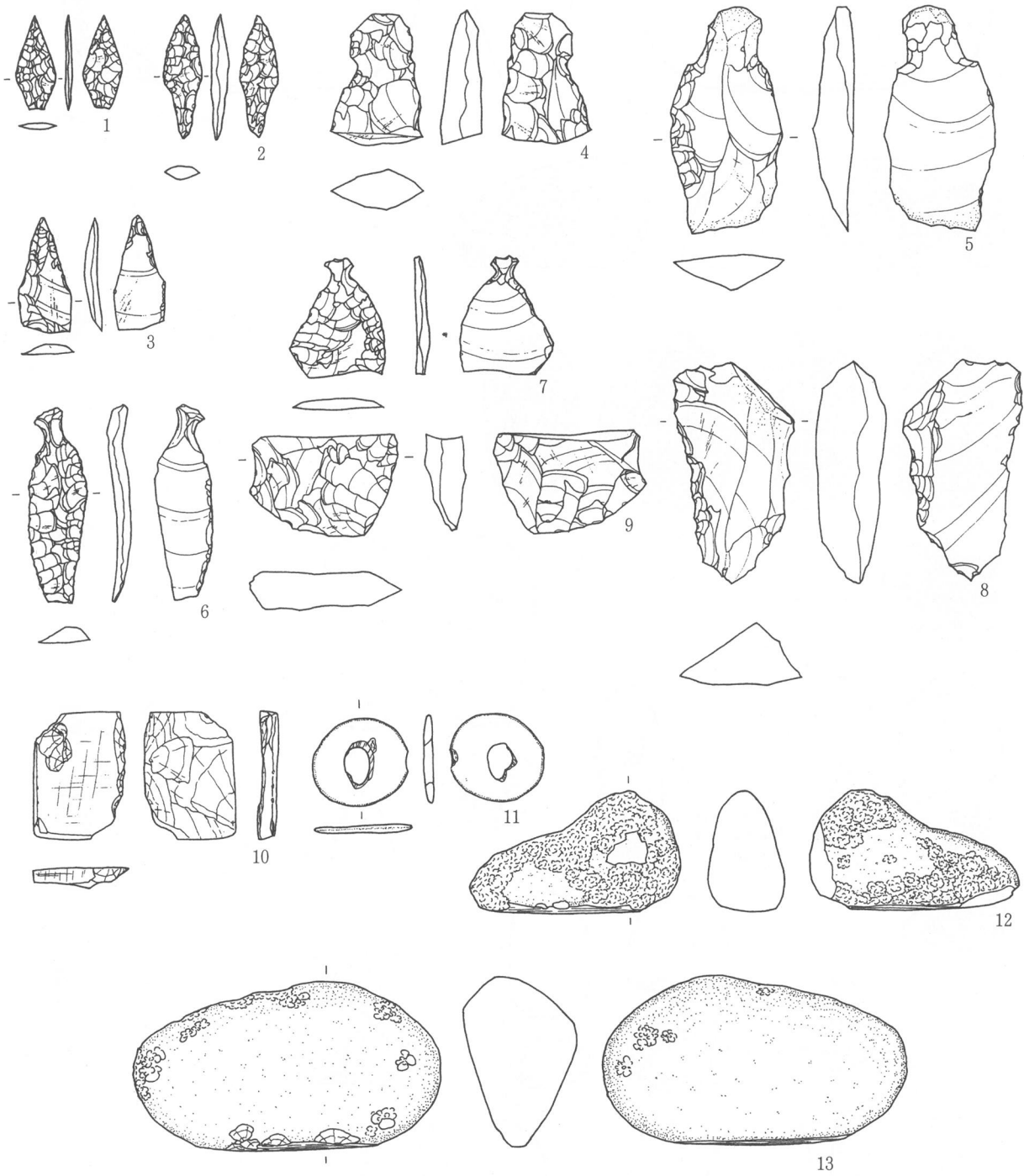
34・35の2点が出土している。34は南東側、35は北西側の出土である。

石 皿

36ほか計2点が北西側のI-10・11区から出土している。36は安山岩製である。

台石

37ほか計3点が北西側のI-10・12区より出土している。



図Ⅳ-2 石器(1)



图IV-3 石器(2)



図Ⅳ-4 石器(3)

表Ⅳ-3 石鏃一覧表

No.	グリット名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図番	備考
1	H-12 d-4	Ⅳ	29.9	12.8	2.3	1	黒曜石	1	無柄
2	H-14 e-5	Ⅲ	39.2	13.4	6.1	1	頁岩	2	有柄
3	I-10 d-1	Ⅳ	36.1	18.4	4.8	3	頁岩	3	未製品

表Ⅳ-4 つまみ付きナイフ一覧表

No.	グリット名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図番	備考
1	D-2 c-2	Ⅲ	41.5	29.4	13.9	14	頁岩	4	一側縁両面・一側縁片面加工
2	F-1 b-4	Ⅲ	70.2	36.0	12.3	27	頁岩	5	一側縁片面加工
3	H-12 e-5	Ⅳ	62.1	20.0	5.5	7	頁岩	6	両側縁片面加工
4	拡張区	Ⅲ	37.1	29.9	3.8	3	頁岩	7	両側縁片面加工

表Ⅳ-5 削器一覧表

No.	グリット名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図番	備考
1	H-15 a-2	Ⅲ	71.0	40.9	23.1	51	頁岩	8	一側縁片面加工

表Ⅳ-6 石核一覧表

No.	グリット名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図番	備 考
1	D-1 e-1	Ⅲ	40.7	43.7	23.7	36	頁 岩		
2	D-1 e-5	Ⅲ	76.1	48.9	63.6	255	頁 岩		
3	D-2 e-3	Ⅲ	56.2	41.6	36.7	80	頁 岩		
4	E-1 b-5	Ⅲ	41.9	31.6	38.0	41	頁 岩		
5	E-1 e-5	Ⅳ	36.8	41.5	32.6	55	頁 岩		
6	E-2 c-2	Ⅲ	28.3	37.3	22.6	21	頁 岩		
7	E-2 d-2	Ⅳ	28.6	35.2	24.7	18	頁 岩		
8	E-2 d-3	Ⅲ	86.0	58.0	73.0	250	頁 岩		
9	F-2 a-2	Ⅳ	130.0	68.5	98.0	815	頁 岩		
10	H-10 c-2	Ⅲ	42.6	69.0	67.5	86	頁 岩		
11	I-14 a-2	Ⅲ	52.1	46.5	21.4	46	頁 岩		

表Ⅳ-7 Rフレイク一覧表

No.	グリット名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図番	備 考
1	I-10 d-3	Ⅲ	80.0	53.8	20.3	82	頁 岩		
2	試掘		31.0	47.5	12.5	20	頁 岩	9	

表Ⅳ-8 Uフレイク一覧表

No.	グリット名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図番	備 考
1	H-13 c-5	Ⅲ	57.0	29.9	10.1	8	頁 岩		
2	H-13 e-2	Ⅲ	81.4	36.9	19.5	16	安 山 岩		
3	H-14	攪乱	86.8	70.5	22.9	53			
4	I-10 a-4	Ⅲ	152.0	84.0	61.0	374	安 山 岩		
5	I-11 b-1	Ⅲ	106.0	57.5	24.5	122	頁 岩		
6	I-13 b-2	Ⅲ	88.6	36.4	15.1	42	安 山 岩		

表Ⅳ-9 石製品一覧表

No.	グリット名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図番	備 考
1	H-13 c-4	Ⅲ	59.7	44.0	9.2	34	緑色泥岩	11	
2	I-10 c-2	Ⅲ	45.5	41.2	4.4	7	泥 岩	10	自然礫に穿孔

表Ⅳ-10 すり石一覧表

No.	グリット名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図番	備 考
1	E-2 d-2	Ⅲ	55.6	100.9	37.8	214	安 山 岩	12	ほぼ前面に敲打調整
2	H-10 b-3	Ⅲ	78.7	140.1	47.4	740	花崗閃緑岩	13	断面三角
3	H-12 c-1	Ⅲ	92.2	168.0	65.1	1,340	花崗閃緑岩	14	断面三角
4	I-10 a-5	Ⅳ	61.5	93.8	33.1	268	花崗閃緑岩	15	器面全体に敲打調整
5	試掘		73.0	155.0	55.0	790	花崗閃緑岩		断面三角
6	試掘		77.0	123.0	47.8	570	安 山 岩		板状礫を使用

表Ⅳ-11 たたき石一覧表(1)

No.	グリット名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図番	備 考
1	D-1 d-1	Ⅲ	53.0	67.8	33.9	136	安 山 岩		欠損
2	D-1 e-2	Ⅲ	67.1	63.3	34.1	192	安 山 岩		
3	D-1 e-5	Ⅲ	115.5	42.9	48.7	328	安 山 岩		腹面に敲打痕
4	D-2 e-3	攪乱	98.3	54.2	57.1	323	花崗閃緑岩		下部、腹面に敲打痕
5	E-1 e-4	Ⅲ	83.5	62.6	43.6	333	安 山 岩	16	器面全体に敲打痕
6	F-1 a-1	Ⅲ	87.6	36.8	37.0	186	花崗閃緑岩		焼け
7	F-1 a-5	Ⅲ	113.2	52.2	60.9	444	花崗閃緑岩	17	下部、側縁に敲打痕
8	F-1 b-1	Ⅲ	90.4	48.5	30.5	169	安 山 岩	18	前面に敲打痕

表Ⅳ-12 たたき石一覧表(2)

No.	グリット名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図番	備 考
9	H-9 e-5	Ⅲ	68.4	84.6	60.5	290	安山岩		欠損
10	H-10	攪乱	70.5	49.6	25.8	81	安山岩		欠損
11	H-10 b-4	Ⅲ	89.8	53.3	36.4	239	花崗閃緑岩	19	下部、腹面、側縁に敲打痕
12	H-10 c-3	Ⅲ	69.6	41.2	25.1	85	安山岩		全面に敲打痕
13	H-10 d-1	Ⅲ	98.2	72.4	44.8	481	安山岩	20	下部に敲打痕
14	H-10 e-3	Ⅲ	76.1	47.9	27.4	154	花崗閃緑岩		側縁に敲打痕
15	H-12 c-1	Ⅲ	49.7	46.5	38.7	147	花崗閃緑岩		下部に敲打痕
16	H-12 e-2	Ⅲ	78.2	70.0	27.2	180	玄武岩		両側縁に敲打痕。石錘未製品?
17	H-13 d-2	Ⅲ	45.3	37.7	25.8	29	安山岩	21	下部、腹面に敲打痕
18	H-14 c-2	Ⅲ	91.0	43.3	39.6	223	安山岩	22	下部腹面に敲打痕
19	H-14 e-2	Ⅲ	47.8	47.3	36.5	98	安山岩	23	下部に敲打痕
20	I-9 a-4	Ⅲ	48.6	45.3	43.9	119	安山岩		欠損
21	I-9 b-5	Ⅲ	42.2	37.1	53.8	70	安山岩		欠損
22	I-9 c-4	Ⅳ	78.2	65.2	45.3	218	安山岩		欠損
23	I-10 a-1	Ⅲ	61.6	37.9	23.1	87	安山岩	24	下部に敲打痕
24	I-10 a-2	Ⅲ	55.5	49.6	23.1	66	安山岩		欠損
25	I-10 a-3	Ⅲ	69.8	61.0	26.3	178	安山岩		欠損
26	I-10 a-4	Ⅲ	92.0	47.5	28.2	164	安山岩	25	全面に敲打痕
27	I-10 a-4	Ⅳ	57.9	63.2	26.3	140	安山岩	26	下部に敲打痕
28	I-10 b-3	Ⅳ	49.4	45.5	31.1	93	花崗閃緑岩		欠損
29	I-10 b-4	Ⅲ	61.6	43.3	45.0	144	安山岩	27	下部に敲打痕
30	I-10 b-4	Ⅳ	70.2	40.7	28.0	95	安山岩		下部に敲打痕
31	I-10 c-1	Ⅳ	86.9	56.5	29.1	204	花崗閃緑岩		下部、腹面に敲打痕
32	I-10 c-2	Ⅳ	75.6	52.0	37.6	171	安山岩		腹面に敲打痕
33	I-10 c-3	Ⅳ	123.7	65.0	59.7	540	安山岩	28	腹面に敲打痕
34	I-10 c-4	Ⅳ	96.2	64.6	27.4	223	花崗閃緑岩	29	側縁の下部に敲打痕
35	I-11 a-5	Ⅳ	61.2	52.2	32.8	149	安山岩	30	下部に敲打痕、側縁に擦り
36	I-11 b-4	Ⅳ	45.2	45.4	38.9	89	安山岩	31	下部に敲打痕
37	I-13 b-3	Ⅲ	64.2	38.8	33.0	109	安山岩	32	下部に敲打痕
38	I-14 a-3	Ⅲ	86.3	51.2	38.0	94	花崗閃緑岩	33	全面に敲打痕、下部に刻みあり
39	試掘		123.0	77.0	36.5	690	花崗閃緑岩		下部、側縁に敲打痕
40	試掘		51.7	53.7	34.3	96	花崗閃緑岩		欠損
41	試掘		43.6	36.7	28.4	58	花崗閃緑岩		下部に敲打痕
42	試掘		65.9	35.0	33.4	121	花崗閃緑岩		全面に敲打痕
43	試掘		71.0	48.0	29.9	133	花崗閃緑岩		焼け。下部に敲打痕

表Ⅳ-13 砥石一覧表

No.	グリット名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図番	備 考
1	E-1 b-1	Ⅲ	62.8	50.3	21.1	70	泥 岩	34	
2	H-10 c-1	Ⅲ	194.0	122.5	73.0	1,790	泥 岩		
3	H-10 d-2	Ⅲ	50.6	34.2	11.6	31		35	
4	I-10	攪乱	103.3	73.3	31.6	194	泥 岩		

表Ⅳ-14 石皿一覧表

No.	グリット名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図番	備 考
1	I-10 b-5	Ⅲ	122.7	73.8	20.5	147	安山岩		
2	I-11	攪乱	161.0	132.0	22.3	525	安山岩	1	
3	試掘		104.0	86.0	41.5	375	安山岩		

表Ⅳ-15 台石一覧表

No.	グリット名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	図番	備 考
1	I-10 a-2	Ⅲ	198.0	186.0	133.0	5,600	安山岩		
2	I-10 c-3	Ⅲ	204.0	81.5	27.9	520	安山岩	37	
3	I-12 e-4	Ⅲ	172.0	179.0	116.0	4,320	安山岩		

第V章 総括

当遺跡からは遺構はフレイクチップ集中地点1ヶ所、集石1ヶ所が確認されたほか、約548点の遺物が出土した。

本章では、当遺跡の特徴について、遺跡と遺物の面から述べたい。

1. 遺跡について

当発掘区は北西側と南東側に分かれているが、出土土器はともに、縄文時代早期末葉が主体であることから、当遺跡もほぼ同時期のものであると考えられる。またフレイクチップ集中地点や集石などが検出され、C・E・F地区では、縄文時代早期末葉の作業領域と考えられる場が、台地の縁を中心に認められており、ここも、この時期における作業領域の一部と捉えることができよう。

いっぽう、南東側からはフレイクチップ集中地点、北西側からは集石が検出され、2つの地点における場の性格の違いも認められる。南東側から出土した発掘区出土遺物の特徴は、石核が圧倒的に多いこと、フレイクチップや原石が比較的多く出土することである。このことから当側では、原石を持ち込み、有用なフレイクを取り出す作業を行っていたものと考えられる。たたき石はフレイクチップ集中地点出土の1点を始め、南東側に9点が出土しているが、それらの中には、フレイクを取り出す作業に用いたものであったであろう。一方、北西側に特徴的なのは、すり石・石皿・台石である。たたき石も多く、I-10区を中心に30点が出土する。このことから、北西側で植物性食物（木の実など）等の加工の作業をしていたことを伺わせる。

当時、台地の先端部にあたる南東側は直接海を望むことができ、一方北西側には沢がある。こうした天然の立地条件を利用したかたちで場を使い分けていたと捉えることができよう。

ただ、たたき石以外の遺物点数が極めて少なく、特に、南東側のフレイクチップは集中地点のものを含めても、213点と少ない。ここが作業に利用された場であったとしても、作業場として主要な位置を占めていたとは言い難い。それには、当地点が斜面という活用しにくい場であったことにも理由があろう。

2. 遺物について

当遺跡では4点のすり石と、43点のたたき石が出土した。当地点でのたたき石の数は、フレイクチップの点数やすり石、石皿、台石の点数と較べて若干多く、たたき石の素材となる石を保管したのではないかと推定される集石遺構の存在や発掘区全体における小礫の多さについて、調査中より疑問に思っていた。ここでは、当地点出土のすり石、たたき石をいくつかのタイプにわけて説明し、その特徴について述べたい。

①すり石のタイプ

A：断面三角のタイプ（13・14）

B：すり面が広く、器体全体に敲打による調整がみられるもの（12・15）

Aは縄文時代早期末葉の典型的なすり石の形である。それに対し、Bはすり面が広いこと、器体に敲打による調整があるなど、北海道式石冠に近い印象を受ける。AとBは形状・製作方法においてかなり異質である。

②たたき石のタイプ

- A：礫の下端や側縁など一部に敲打痕をもつもの（17・19～24・26～29・32）
- B：礫の全面に敲打痕が認められ、また、敲打痕が広い範囲であるもの（FC集中1・25）
- C：広い敲打痕の一部をすり面として利用しているもの（18・30）
- D：礫の全面に敲打痕が認められ、一部に敲打による装飾的な文様があるもの（33）
- E：礫の全面を敲打痕で被い尽くしているもの（16）

AとBはごく普通にみられるたたき石である。Cは広い敲打痕の一部をすり面として用いている。敲打痕は、石の表面がざらつき、“おろしがね”のように何かを擦り潰すのに好都合なものであるということを経験で学習したであろう。敲打痕を二次的にすり面として再利用した例はその後の時代のものにも多く発見されており、彼らの意識の中ではたたき石→すり石への変換は比較的容易であったようである。Dは基本的にはBと良く似ているが、下端部には敲打行為により意図的に付けられたと見られる装飾文様のようなものがみられる。これが何を意味するかは不明であるが、これは、この石で何かを叩いた結果ついたものというよりは、何かでこの石を叩いた結果付いたものと言えよう。その意味でEも同様の範中に入るものかと考えられる。Eは礫の全面を敲打痕で被い尽くしているもので、これも、作業の結果ついたものではなく、何らかの理由でこの石を敲打痕で被い尽くした（言い換えれば、敲打による器面の調整をした）ものといえよう。

器面全体を敲打痕で被い尽くす（つまり器面を敲打調整をする）という手法をみる限り、すり石のBタイプとたたき石のEタイプは共通している。あるいは、たたき石のEタイプのものにすり面になるような平坦面を敲打調整で作出したのが、すり石タイプBのNo15であり、それをすり石として活用し、すり面が形成されたのがNo12なのかもしれない。

当遺跡はもともと、たたき石を用いてフレイクの取り出しや植物加工などを行っていたのであろう。しかしその傍ら、上記のように様々な工夫をして、すり石、たたき石を利用してみたのであろう。本地点は青苗遺跡全体からすれば、極めてアウトサイドな場所ではあるが、こうした場であるからこそ様々な“遊び”ないし試みもできたのであろう。

写真図版



遺跡遠景



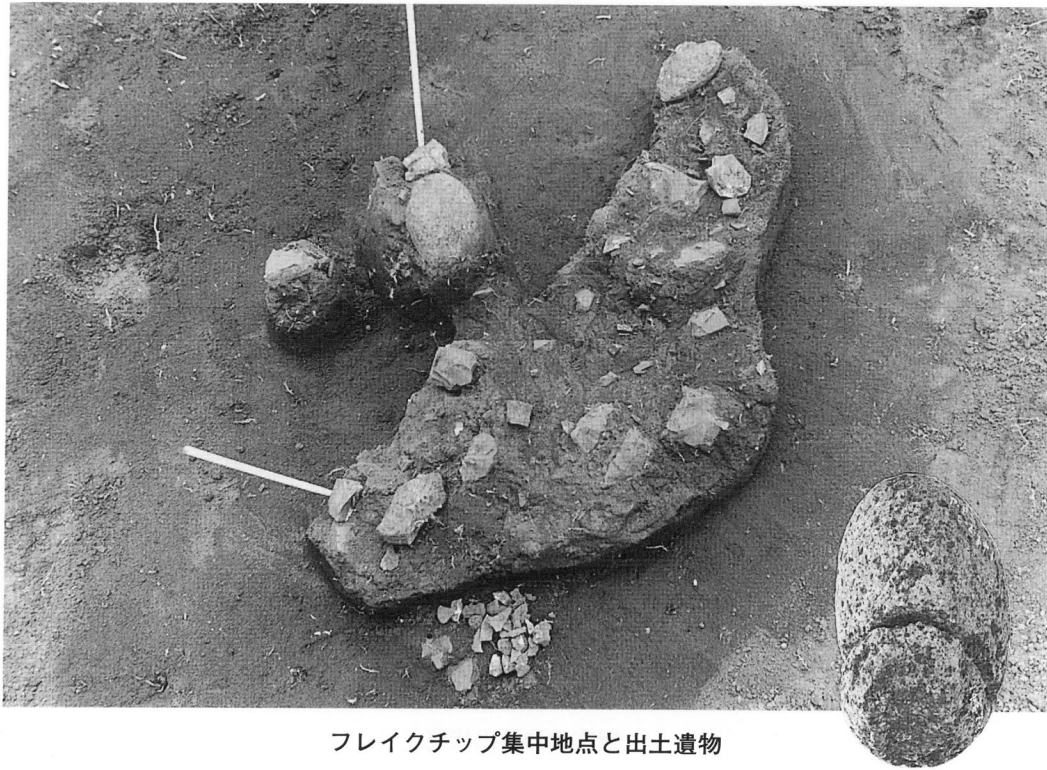
土層断面 (I-9区)



発掘調査状況 (1)



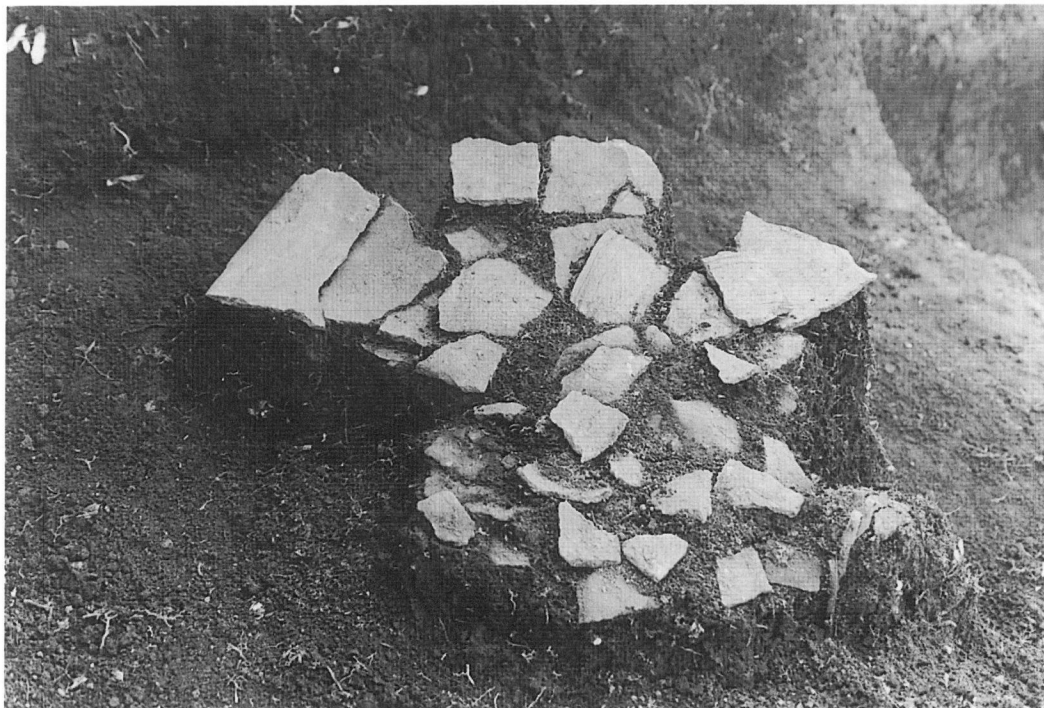
発掘調査状況 (2)



フレイクチップ集中地点と出土遺物



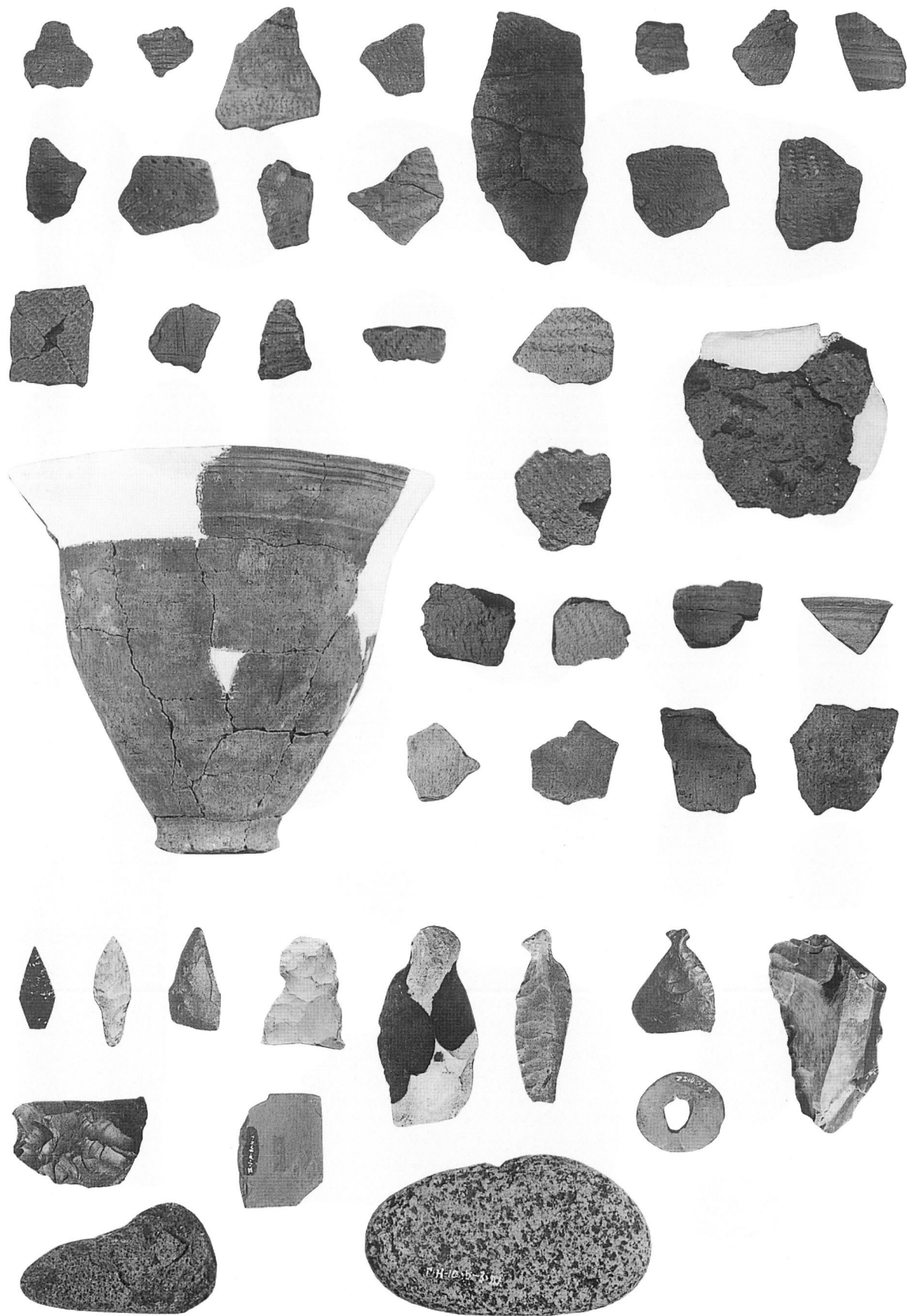
集石遺構



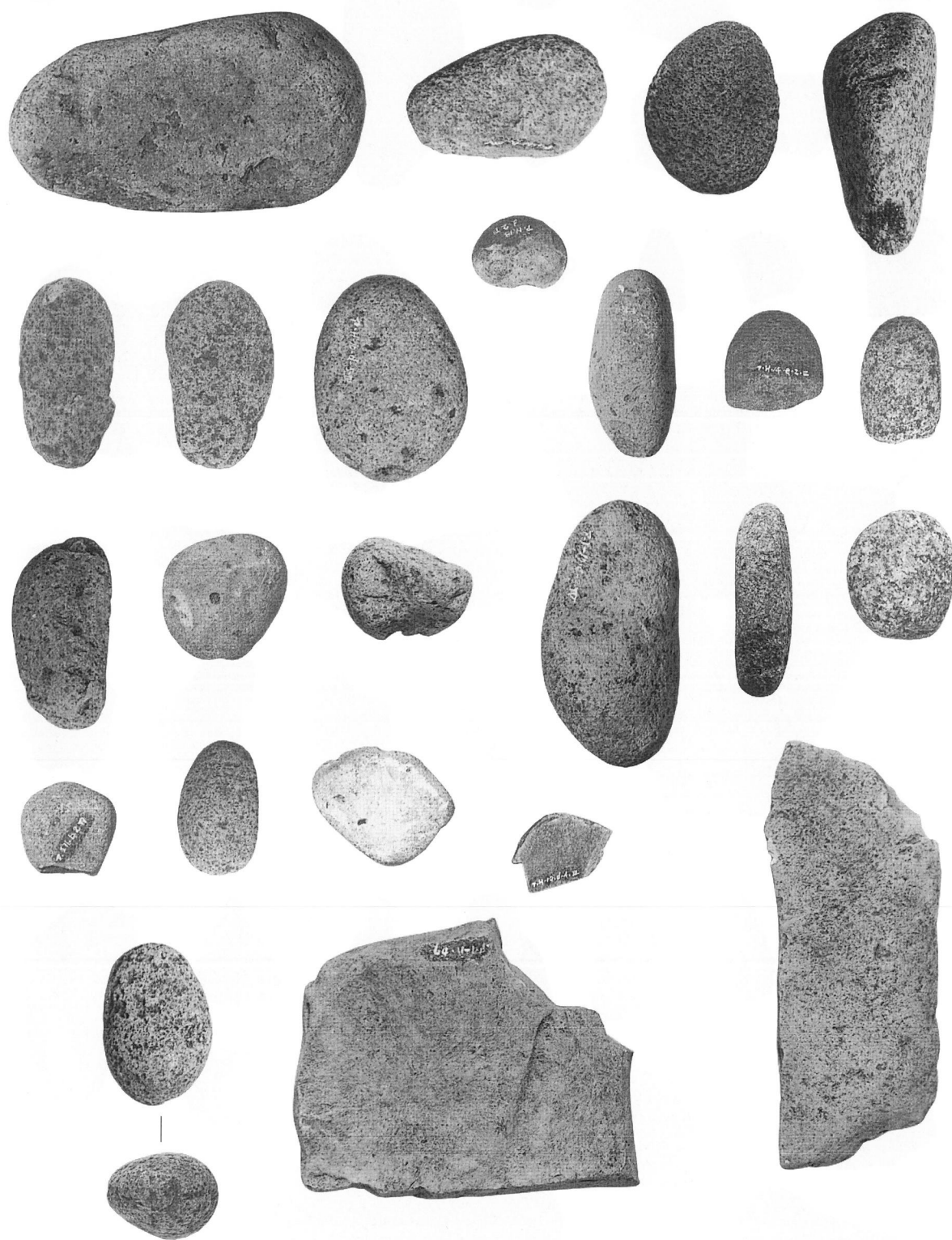
擦文土器検出状況



完掘状況



遺物 (1)



遺物 (2)

青苗遺跡～貝塚台地北東斜面～

－奥尻空港整備事業・進入灯台建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2003年11月 発行

発行 奥尻町教育委員会
北海道奥尻郡奥尻町字奥尻317番地地先
☎ 01397 (2) 3890

印刷 (株)長門出版社 印刷部
北海道函館市日乃出町11番13号
☎ 0138 (52) 2461
